

## 命とは

(原文)

平野 このは (14 歳)

静岡県

不二聖心女子学院中学校

「いのちって何？」

そう聞かれたとき、私は中 3 になって初めての宗教の授業を思い出しました。その授業では、先生がパスカルのパンセについて話してくださいました。その内容は、「人間は 1 本の葦にすぎない、自然の中でももっとも弱いものである。」と、いうものでした。私はこの文を読んで、人間の命は「葦」と例えられるほど重要なものではない、そして世界で一番弱いと思うのと同時に、私たちが努力をして、考えて生きていることをバカにされたと、腹が立ちました。しかし、この文には次のような続きがありました。

「だが、それは考える葦である。」この世界に、考えるということを出来るのは人間しかいません。その人間の命は儂く、尊いものとして捉え、毎日私たちは暮らしています。しかし、その命とは何かと聞かれて完璧に答えられる人はいないでしょう。私もこの問いを聞かれても正確には答えることはできないと思います。けれど、その答えを探そうと命とは何か考えるようになりました。しかし、命について考えれば考えるほど私がどんな風に命を捉えているのか分からなくなってしまいました。

そんな時、私は「ラルフを救え」という 3 分ほどの短編映画を見つけ、気になり見てみました。その映画はウサギのラルフが主人公で明るくて楽しそうな映画かなと予想していました。しかし、私の予想とは全く違ったとても重く、悲しい内容でした。ラルフはただのウサギではなく、動物実験用のウサギだったのです。また、ラルフだけでなく、ラルフの子供たちや親までも動物実験によって、亡くなっていました。その映画を見て、私たちが普段使っている洗剤や化粧品はラルフのように実験された動物がいるからこそ使っていることに気づかされました。その映画で、私が特に衝撃を受けた場面は、ラルフが両目に注射され目が見えず、背中に薬品をかけられ、火傷をしているのに、「とても幸せだ」と言っていることでした。私がラルフだったら逃げ出したいくなるような生活なのに、人間のためになるなら死んでもいいと言っているラルフにとっても胸が痛みました。私はこの映画をみて、人間は自分自身の命を大切にするだけで他者の命には興味がないのではと考えました。また、自分もその考えになっていたことに気が付きました。今までは深く考えずに使っていた日用品の様々なものには動物たちが犠牲になっていることを知らずに使っていたのです。また、日用品だけでなく、「医学の発達のために」、「科学の発展のために」と、大学や研究所、さらには兵器開発のために軍事まで、様々な分野で

1 億匹以上の動物たちが私たち人間のために犠牲になっています。

「いのちって何？」この問いの完璧な答えは誰も知らないと思います。しかし、私が経験したことから考えると、いのちとは感謝すべきものだと思います。例えば赤ちゃんが生まれたときに母親は「うまれてきてくれてありがとう」といい、食事をするときには「いただきます」「ごちそうさまでした」と、肉や魚などの食品に感謝をし、また、それを作ってくれたひとに感謝の意味を込めて言います。それと同じように日々使っているものにも感謝をし、自分たちが安全に暮らしていることに感謝をしなければいけないと私は思いました。